

現地中学校 2 校への 防災授業の実施

現地研修の様子 SMP11への防災授業



現地研修の様子 大歓迎されます



現地研修の様子 五輪真弓の「心の友」が最も有名



現地研修の様子 SMP11への防災授業の様子

大槌高校のみなさんの講義内容

- 津波のメカニズム（プレートの紹介）
- 防災教育の重要性
- 大槌高校復興研究会の紹介
- ○×クイズ



現地研修の様子 写真・動画撮影の嵐



異文化体験

現地研修の様子 イスラム教・モスク体験



アチエ津波博物館

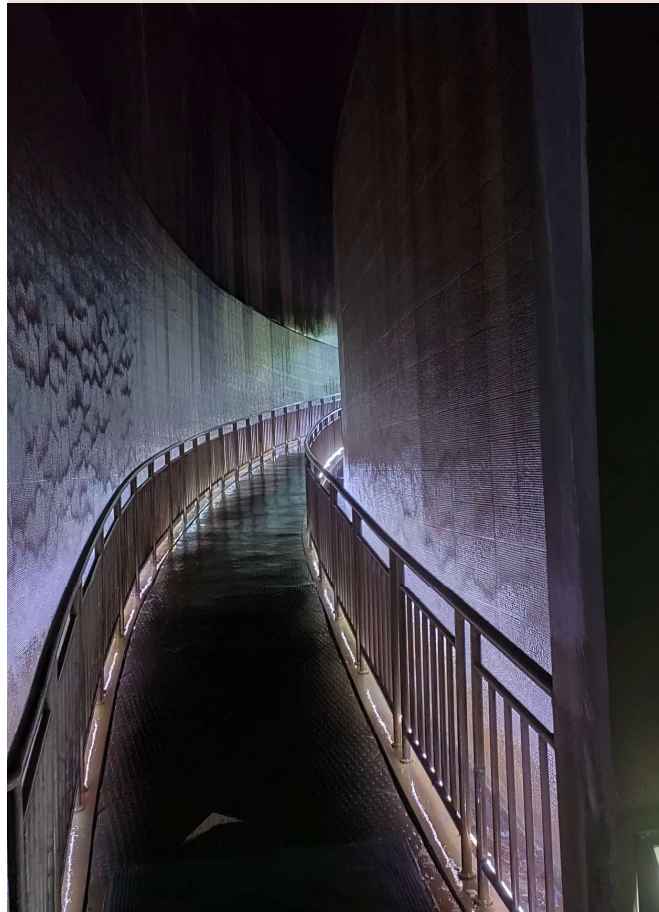
現地研修の様子 アチエ津波博物館



©walavie 本資料の無断利用及び転載を禁止します。

現地研修の様子 アチエ津波博物館

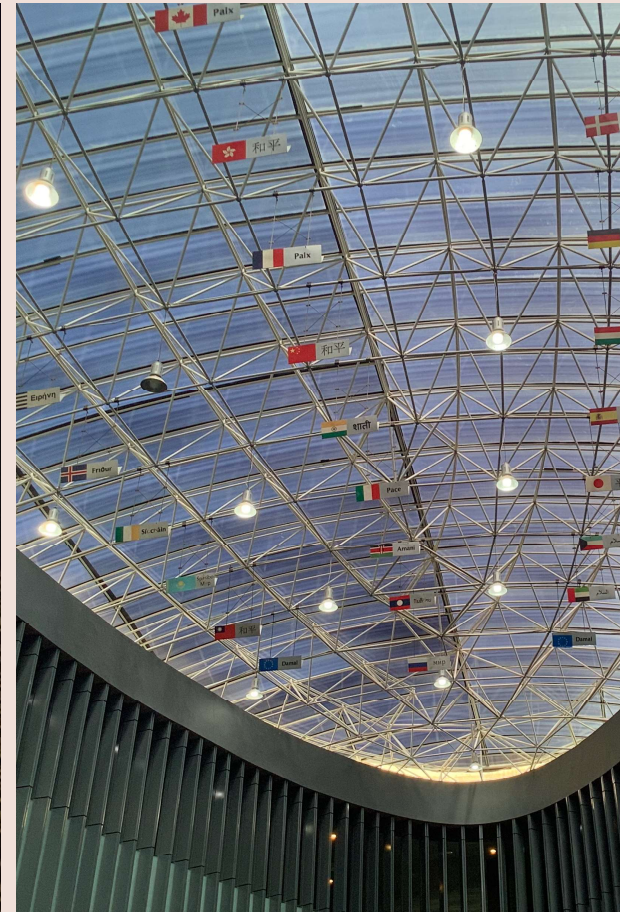
津波を体験する回廊



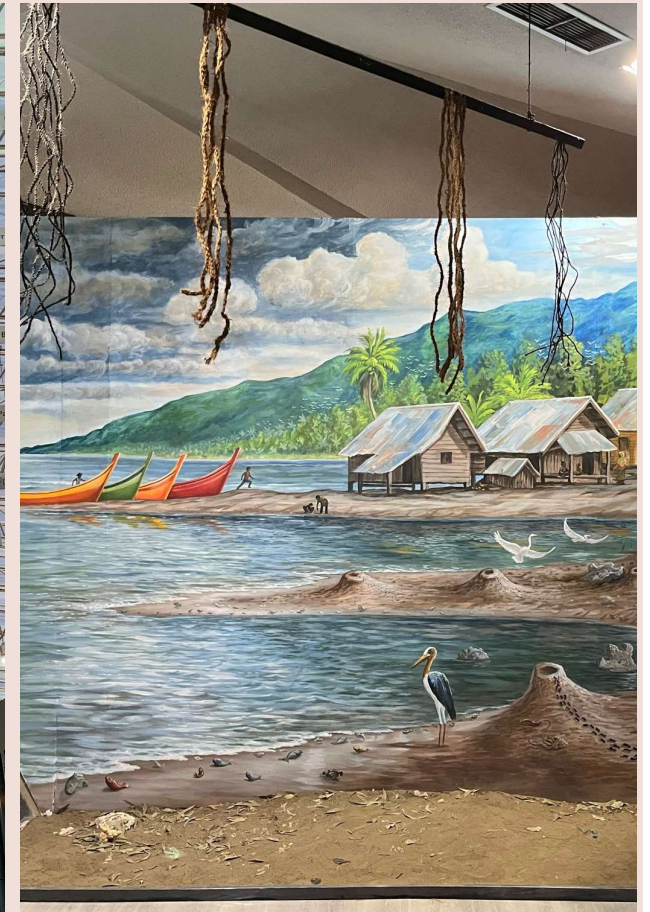
ドーム型慰霊塔



支援を受けた国の国旗



災害を察知する動物の絵画



帰国後の所感

- 高校生の感想
- 運営側の感想

高校生のアンケート結果

大槌の高校生

Q.参加して得られた、学び・気付きは？／特に面白かった、意義深いと感じたことは？

- 現地の人たちは結構自由・明るくて優しい人が多い
- インドネシアは結構親日国で、日本の文化に強く興味を持っていることがわかった
- アチェの津波博物館では、被災した人の気持ちを感じられるような工夫が施された展示や通路だった
- 言葉が通じなくても諦めなければなんとかなる
- アチェは自分が思っていたより自由だったこと
- 宗教のこととか生活様式の違い
- 日本人の自分が日本をもっと知ろうと思った

Q.スタディツアーでの自分の振る舞いで、もっとこうしたら良かったと考えていること

- もっとたくさん疑問をみつけて学べばよかった
- アチェの食べ物や言葉の意味をスマホで調べずに現地の高校生に直接質問すればよかった

アチェの高校生

- マングローブ畑に行けたこと
- 災害に対する日本の文化を知れたこと
- 日本の学校の組織や、津波への対処を知れたこと
- 日本の学生の多くが自分と同じ趣味を持っているとわかったこと
- 学校にはないものを勉強しようとしたこと
- 日本の生徒のことを知れたし、彼らが津波に対処するためにどんな努力をしているのか知れた
- 個人的にはマングローブ植林体験が最も面白く意義深いと思った
- 知識を学んだこと、経験を積めたこと、海外の生徒と会えたこと

- 日本語を学んでおけばよかった

同行した復興研究会顧問・木村有里先生コメント

英語がちょっと出来るかできないか、くらいの生徒が母語がインドネシア語の人とコミュニケーションを取るにあたり、途中でくじける生徒もいるかと予想していたが、アチェの人が温かく迎え入れてくれたこともあり、最後まで楽しく過ごしていた。身振り手振りでコミュニケーションをとる努力もしていて、とても成長が見られた。



防災ノウハウを「専門家」としてシェアするために、その準備を含めてそして現地での学びを踏まえて、「防災の専門家になっていく」まさにその成長が見られた

これまでは、語ることがタブーのようにされる空気感があった。そのため、防災を「語っていく」ことをどこかためらいがあったのだと思う。いろんな取材等も受けて来たが、「語っていいのか？」という迷いも。アチェでは、そのような（懸念もなく）思ったことを語っていたように見えた。そして一度、そのように言葉にしたことで、自己認識できたのだと思う。

宗教や生活様式の「違い」も、生徒たちは楽しみながら受け入れていた。リスペクトしながら、「そういうもの」として捉えていたようだ。

アチェスタディツアーの意義 運営者の学び

● 異文化交流が高校生に与えるインパクト

- 大小様々な文化・価値観の違いが高校生に与えるインパクトの大きさは計り知れず、大人よりも「受け入れる」人間性がある

● 「伝える」ことの大切さ

- 日本の生徒が当たり前だと思っていること(避難訓練のあり方など)がインドネシアの生徒にとっては目新しかったり、言葉にして伝えなければ互いに気づかなかったであろうことが「伝える」ことで可視化された

● 生徒自身にお任せすることの意味

- 運営側の介入を最小限とし、生徒自身が自分の言葉で想いを語ることで、生徒が自分や周囲の考えと正面から向き合っていた

● 共通項のもたらす親近感

- 交流の中で「防災・震災伝承」のみならず、「アニメ」「漫画」など、日本・インドネシアの双方の生徒が持つ共通項に気づくことで、打ち解けたり、お互いの考え方をより深く理解しようとするようになった

アチェスタディツアーの意義 地域にとっては？

● 殻を破れる人材の育成

- 生徒たちがそれぞれの感じる壁に対してチャレンジする様子が見られ（英語でのコミュニケーション、自分たちの取組の効果的な伝え方の検討など）、また、達成できなかったことに対して「もっとこうすればよかった」「次はこうしたい」等のコメントが得られた

● 「友達の友達」「家族の友達」としての世界との繋がり

- 渡航した生徒のみならず、その周囲の生徒や家族が、渡航した生徒との会話の中で新しい気づき・学びを得る様子もあるように感じた

● 伝えるために考え続ける

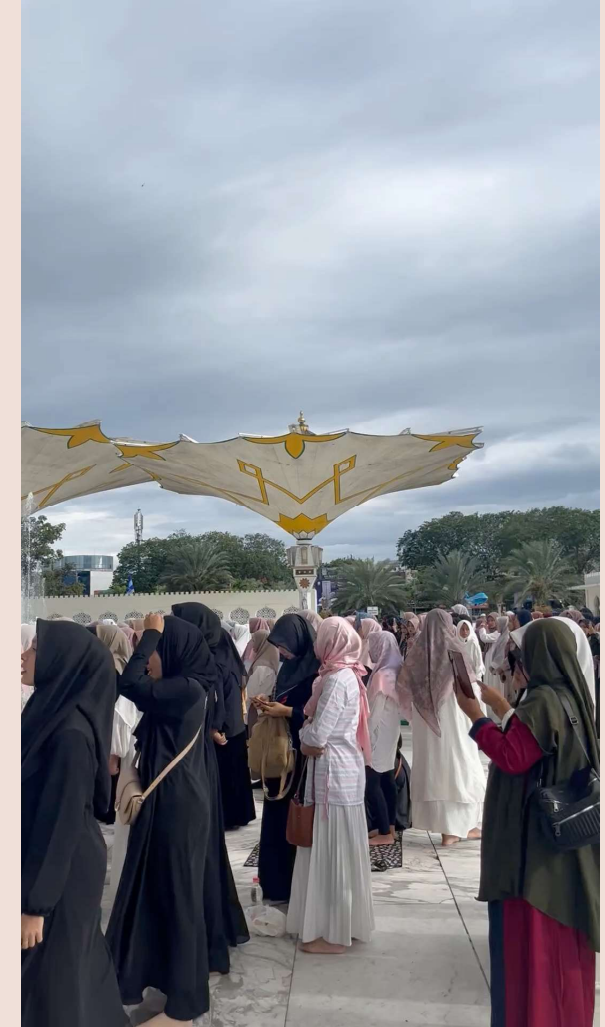
- 今回渡航した生徒は自身が被災経験を強く覚えているわけではなかった。そうした中で、伝える相手の顔を思い浮かべ、そして文化・言語の違いを踏まえて何を伝えるべきか・どうすれば伝わるかをしっかりと議論することができた。これは今後被災した世代が少なくなっていく地域において大きな価値があると感じる

多様な防災文化の醸成とは

- 国や地域ごとで（コミュニティ）防災の「あり方」はさまざま
- 「日本式の避難訓練」が根付くことが重要ではない
- 震災伝承・防災文化を継承していくためには「多様なきっかけ」

スマトラ沖地震による大津波から
19年が経過した12.26のアチエ

12月26日は毎年追悼式典を行う

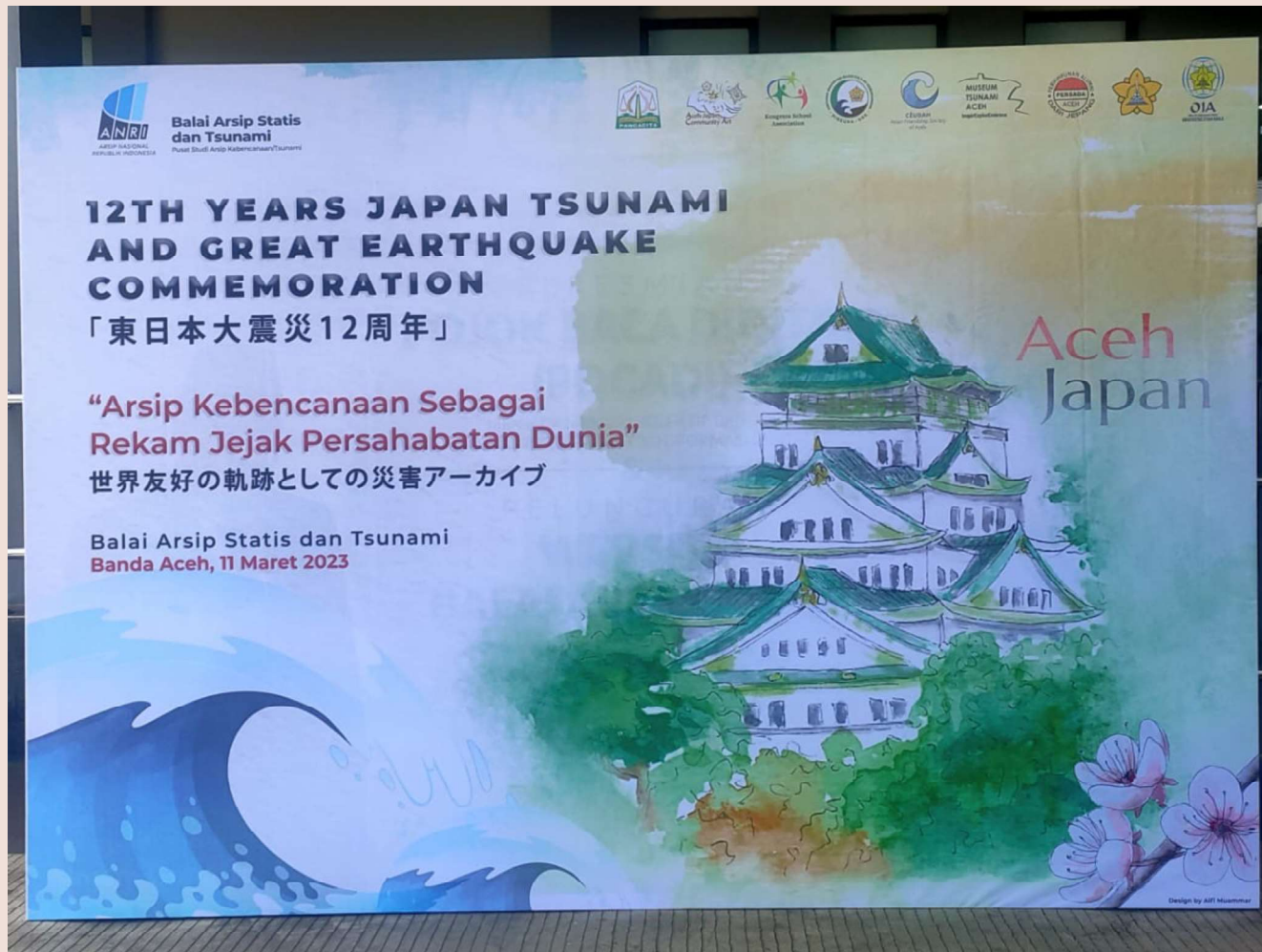


街の至る所にポスターやのぼり / 空港の展示



3.11にはアチエ津波博物館で 追悼企画の実施

アチエ津波博物館で3.11追悼企画の実施



ご清聴ありがとうございました。

